

自我意識の宗教的展開

田中寛光

それは慥かロツツエが何處かで言つた事の様にて記憶してゐるが「蛆蟲は、明瞭な自我の觀念も宇宙の觀念も持つては居ないけれど、踏みつけられた蛆蟲は彼自身の苦しめる自我を彼以外の全宇宙と對立せしめる。蟲は余にとつては、單に世界の一部分にしか過ぎぬ。吾々は各自宇宙を異れる場合に於て兩斷してゐる」と言ふのであるが。此の言葉は仲々味のある言葉で、成程彼の言ふ如く蛆蟲にも或はそんな世界があるかも知れない。併し人の事、いや蟲のことなんかどうでもよいとして、我々人間には實に複雑した個々の自我意識が觀念や行爲の上に色々な形で夾雜してゐる事は否めない事であらう。否、人と人との別個なる自我意識よりも、更に之を掘り下げて靜かに考へて見ると、我々自身の、その身心の中にも全く夾雜せる個々の自我意識があるのであつて、即ち此の事は涅槃經には十界の數量を用ひて説明し、更に天台は種々の經典や論釋を集大成して一念三千論を説けるのを見ても、かゝる事實は瞭解されるであらう。

勿論それには實質的に見るか或は之を論理的に見るかと云ふ見方と、廣義に取扱ふ場合と狹義に使用する立場との二方向があるのであるが、既に天台の「一念三千論」に就いては古くから多くの學者によつて相當研究に研究を重ねられて、その末註や詳解も荷馬の多きに達してゐるので、敢えて我々若輩が生兵法をもぢる迄もないであらう。そこで茲に問題にした事は初めに述べた所の個別なる自己内に於ける自我意識とは何かと云ふ事であるが、此の事に就いてはジェームスは、その著「自我論」に於て之を客我と主我との二方面に分けて斯う述べてゐる。

『己れが何を考へて居る時でも、自分は常にそれと同時に自己我が人格的存在を多少とも自覺して居る。同時にそれを自覺して居るのはまた「我」である。故に我が全自我は、謂はゞ二重であつて、半ば被知者であり半ば智者であり、半ば客体であり半ば主体であり、自我内に二方面を識別することが出来る。此の二方面を簡単に言ひ表す爲に一を客我、他を主我と稱へよう。余は之を「識別せられる二方面」といひ別物といはぬ。如何と

なれば、自我と客我との同一性は、此の兩方面を識別して居る最中でさへ最も否定困難なる常識上の定説であり、従つて研究の結果その妥當性については、何う考へるやうになつてもよいが最初から用語上此の定説を無視してはならぬと思ふからである。』と云つてゐる。惟ふに心理學上に於ける、かゝる見方は自我に於ける個別な世界を、識別せる二方面といひ之を個別なものとは云はぬと云ふのである。即ち社會的外面的自我を客我とし、個人的内面的自我を自我と名くると云ふのであつて、自我と客我とはその本質は飽く迄も同一性なる自我意識より展開せる二方面であつて只用語上之を對蹠的に取扱ふのだと述べてゐるのである。勿論心理學上に於ける疑問は心理學の地所に於て解決される筈である。が我々が何時も豫想しておかねばならない事は同一性と云ふ反面には必ず矛盾性と云ふものが潜伏してゐる事である。而も此の相對的な二原理を完全に我がものとしてゐないと、我々に最も重要な宗教問題でさへもその根本が不安定になるのではなからうか。即ち自己内に於ける別個なる自我意識の解決はそれ程、我々にとつて重要な問題であると思はれるのである。併しそれでは之を如何なる形式で表現するかと云ふに、若し心理學で云ふ如く主客兩我を用ひて之を表現せんとするならば、必ず個人的内面我を以て之を自我とし社會的外面我を名けて客我とせねばならぬ事になるのである。併しそれではいかぬ。なぜならば、心理學の地所に於てはそれでよい

自我意識の宗教的展開

であらふ。が事一度、かゝる問題が宗教の本質上に迄點火してくると宗教の社會的性質を客我と名け、個人的性質を自我とせねばならぬ事になるであらう。若しそうなるとジェームスはそれでよいかも知れない、併し、社會學者であるデュルケムが不平を云ふであらう。よしデュルケムが一步譲つて黙認したとしても今度はオットーが苦情を云ふであらう。省みて之を惟ふに自己内に於ける個別なる自我意識の問題は更に、同一性と矛盾性との對蹠的な争ひとなり、之が一度我々に尤も重要な宗教の本質問題に迄進行すると如何に之を解決すべきかは相當困難な問題となるのである。考へようによつては極樂の距離の測定や色界十八天の探險の方が或は容易かも知れない。之を何時迄睨み合せてゐたのでは埒があかぬから、てつとり早く私自身の立場に於て之を決裁して見たいと思ふのである。即ち自我意識より展開せる對蹠的な宗教の本質問題を取扱ふのに主客兩我の概念より離れて、私のもつ二つの名前、即ち俗名の光次郎と僧名の寛光と云ふ二つの名前を以て個別な宗教意識に對して何れにも組せずその解決を見たいと思ふのである。念の爲かゝる主客兩我の名稱を離れたと云ふ事實を之を數學の式で表すと、 $\text{我} \parallel \text{客} \text{對蹠} \parallel \text{我}$ となるのである。そうしてその形式を對話の形で表現する事とした。

二

光「宗教とは神に對する絶對憑依の感情であると云ふマツヘ

の說に異存はないか」寛「六ヶ敷い質問だね、が絶対憑依と云ふ事は今日通説の様に云はれてゐる事で敢て異議はない。併し一般に考へられてゐる様に、所謂他力本願のそれではなくして自力より湧き出づる所の憑依の感情でなくてはならぬと思ふ」光「それでは絶対憑依と言ふ意味ぢやないぢやないか、既に絶対と云ふ以上、それは我々が吾々自身を徹頭徹尾依存的なものであると自覺する事でなければいかぬではないか、言ひ換へれば、吾々有限なる人間が、飽く迄無限なる宇宙勢力としての神に依存する事に於てのみ生きて行けると云ふ事が敬虔なる歸依の本質でなくてはならぬ。吾々自身の微弱なる力に依つて生きてゐるのではなくして、言はゞ宇宙勢力の神に依つて生かされてゐるとの感情こそ、絶対憑依と云へるのであつて、自力より湧き出づる所の憑依の感情と云ふ事があるか」寛「それでは生かされてゐると云ふ事は一体誰が自覺し、誰が表現するのか、又吾々以上の絶対支配者たる神に誰が感應交通するのか、凡て自力ではないか、かゝる自力を前提として信ずる、拜む精進修行の姿、その瞬間こそ神と感應交通する所の絶対歸依の美しい宗教の本質ではないか」光「それはいかんよ。神に對する絶対憑依の感情とは、何も自力や他力と云ふ相對的な何物をも挾んではならぬ立場を言ふのである。一体吾々が自分の力で、自分の頭の中で思惟した神は絶対の神ではないのだ、言はゞ神は主であり、吾々人間は従なのだ、それは佛と云ふとも又同然であ

る。即ち唯佛與佛の境界、或は又非已智分とも説かれてゐる境界こそ、吾々人間の一切の辨證法を以てしても表現する事の出来ない境界なのだ、その神に對して自力より湧き出づる感情と云ふ事があるか」寛「神の本質を論じてゐるのではない。宗教の本質を言つてゐるのだ、宗教と言ふ以上は、人と神との結び付き關係を何等かの方法で表現する個有名詞であつて、神そのものの本質のみを主張して、直ちに宗教本質の全体とする事は間違つてゐると思はぬか」光「やめ給へ、君は宗教の本質そのものを何處迄も論理的に解釋しようとしてゐる。そんな冷たい氣持では僕の云ふ本來の氣持が解るまい。成程憑依と云ふ以上自己の姿は認める、又認めなくてはならぬ筈だ。併し湧き出づる心と云ふ様な勇ましいものではあり得ない、それは何處迄も吾々人間を罪の子としての頼りなき、不完全さ、更に絶望より逃れ救はれようとする哀れな姿でなければならぬのだ」寛「併し、頼りなき、不完全さから逃れ救はれ様とするには、大勇猛心がなくてはならぬではないか」光「そうではない、それを吾々が勇猛心と名くるのは既に言ひ過ぎであつて絶対憑依と云ふ宗教の本質ではない。何故ならば勇猛心とは神の立場から吾々を見られた言葉であつて、我々の神に對する憑依の姿は全く無力にして、而も頼りなき孤獨の畏怖の感情行爲と經驗以外には宗教の本質はあり得ないのだ」寛「それは君、シュームやジェームスの見方ではないかそれもよい。が、大体孤獨なる人間が神

に對する憑依の感情行爲や經驗と云ふ事は、宗教の本質ではあり得ない、成程狹義の立場から宗教を論ずるならば心理も又一面の眞理であらふ。併しながら宗教は飽く迄廣義の本質を表にせねばならない。即ち宗教本來の目的とは單なる個人と神との直接の關係にあると云ふよりも、人と人との間に於ける夾雜性人と物との結び付きに於ける夾雜性を神聖化さんとする爲に神に祈るのでなければならぬのであつて、言ひ換へれば、宗教とはあらゆる事物を二つのものに分ける生活態度である。例へば現實的なものと理想的なもの、更に「神聖なるもの」と「凡俗なるもの」との二つに分ける態度なのだ、勿論人と人との關係、或は人と物との關係と言へば、すぐに横の平面的な關係のみを豫想するかも知れない。が、そうではない、勿論横の平面的なる關係も重要な宗教の一要素だが、今一つ重要な關係は時間的なる豎の血縁關係である。そして地縁と血縁つまり時間空間を包容したる圓こそ絶対神の姿であり、而もその絶対神の圓と吾々人間との交點即ち憑依の感情こそ宗教の本質なのだ」光「それは君宗教社會學ではないか、君こそデュルケムやオットの宗教觀を模倣して置きながら、僕の意見をシェームやジェームスの模倣觀だと主張するのは卑怯だよ。まあそれもよい、よいだらう。が僕はジェームスの宗教心理を模倣してゐるのではない。勿論影響は受けてゐるだらう。が、若し僕がジェームスを眞似るならば、かゝる現實の具體的宗教を「制度的宗教」と「人格的宗教」との二つに分けて説明するであらう。併し僕はそれをようしない。けれ共、君が知らぬなら一往説明してもよろしい。即ち「制度的宗教」と云ふのは、崇拜とか、供獻、その外神を利用する場合の宗教的儀式や、教會寺院の組織などを中心とする所のもので、而もかゝる制度的宗教は、人間が神の恩恵にあづかる爲の外的手段？を重要視したものだが、之に對して「人格的宗教」の場合は、吾々自身の内面的性格や良心、更に絶望や不完全さなどと云ふ様なものを中心とするので、宗教の本來の面目は兩者の中どちらかと云へば、寧ろ後者を重要視する譯だが、併しそれよりも君の云ふ如く、人と人との結び付きの間に於ける夾雜性、或は又人と物との媒介を神聖化する爲に神が必要であると云ふならば、それは全く吾々の客我のみに憑依の姿を認めると云ふのか、更に外面的自我を廣義のものとし、孤獨なる内面的自我を狹義のものとし、之を以て兩者の優劣を論ぜんと云ふのか、いづれにしてもお話にならないよ。何とならば、既に初に言ふ如く、神に對する絶対憑依の感情である以上我々不完全な思惟を以て、その傍正を云々するに至つては、最早宗教そのものではなくして、それは宗教學の地所だからさ」寛「ものは凡て語る方の氣持になつて理解し給へ、君の様に脱線されたのでは僕が軌道の所論を突進する事が出来ないではないか、自分は何も心理學者の説を否定するのではない。又社會學者の説に肯定するでもない。いづれでもよ

いのだ、大伴君の云ふ如くならばデュームスは甚だ迷惑するよ
何故ならば、彼は初に「宗教」なる集合名詞は説明不可能であ
ると云つて、一般の學者の様に「宗教とは……」と定義する
のを避けてゐるのを見て解るだらう。更に自分が云つた所の
社會面的廣義な宗教の解釋をデュルケムやオットンの様に純粹な
社會學の立場から説明しようとしてゐるのではない、デュル
ケムの社會學的宗教の見方に對する僕の氣持はプロームの「神
信仰の生成」でも讀み給へ。それよりも是非知つて置きたいと
思ふ事は、カントの宗教觀は道德の立場から之を批判し、ヘー
ゲルは之を哲學の立場から眺めたのに對して、シュライヘル、
マツヘルは飽く迄宗教を宗教そのものの立場から取扱つてゐる
が、その態度は實に尊いと思はれる。が併し、何事も一方的で
あつてはならないと云ふ事だ、即ち宗教を論ずる場合その中心
は飽く迄宗教そのものを純粹に見ねばならない。が、更に之を
完全なものにする爲には君の云ふ如く心理學の世界から宗教を
眺めるのも慥に必要な一つだ、又社會學より眺める事も、教育
學の立場からも、或は藝術、哲學等々の個別な世界から宗教を
眺める事も勿論重要な事であるが、我々日蓮學徒はかゝる多方
面より得た收穫を集大成し咀嚼してゆかねばならない。従つて
之を廣義な宗教の社會面と言つたのであつて、若し君が先に言
つた、客我と云ふ立場からの宗教批判も茲まで來れば、勿論同
感だが、どうかね」光「成程お互ひによく話し合つて見ると結

局最後は同じ様だね、併し僕は此の問題に對してはまだいくら
も話したい事があるよ。が、結局宗教は「拜む」事以外には何
物もないと信ずる。そうだこの信ずると云ふ神に賦與された任
務こそ私の宗教なのだ、多方面的宗教觀と云ふ事も結構だが、
あまりものを聞きすぎると自分で自分の存在が解らなくなるよ
つまり僕と君とは對蹠的に凡てを、考へる様になつてゐるんだ
ね」寛「對蹠的と言へば君は宗教の理想郷たる淨土觀に就いて
どう考へるね。例へば遠離穢土欣求淨土と云ふ極樂淨土觀をと
るか、それとも娑婆即寂光土と云ふ法華經の思想をとるかと言
ふ事さ」光「それは勿論法華經の思想を信ずるさ、が法華經の
思想と言つても、あなたがち此土寂光觀ばかりでなくして、極樂
淨土も兜率淨土も説かれてゐるからね。僕はどちらかと云へば
後者の思想さ」寛「それでは未來思想を信ずると云ふのだね。
それも結構でせう。が、法華經の思想は過現未三世を統一した
る所謂廣義な圓形淨土思想である事を忘れてはならぬよ。それ
は丁度宗教の本質問題は、やはり宗教そのものの純粹なる宗教
觀に中心がある様に、淨土思想の中心も、やはり娑婆即寂光、
即身成佛、と云ふ事を中心に於て多方面に展開してゐるのだか
らね」光「君の云ふ事は凡て僕と對蹠的だよ。が、淨土思想觀
に就いてはいづれ又論じ合ふ事としよう」

三

蓋し人と人との個別なる自我意識の世界よりも、更に自己内

於ける即ち精神も肉体も全く同一であるべき一個の吾々人間の
中にはかくも矛盾せる二重の自我意識があり、而もかゝる二重
の自我意識は、何時も淫しなく互ひに個別の世界から矛盾性を
指摘しあひつゝ闘争を繰返してゐるのである。即ち人生は何處
に於ても、又何時の日でも闘争である。今日我々に課せられた
最も大きな問題は戦ふ事である。我々は正しきものを得んと
する爲には戦つてゝ、そして勝たねばならない。惟ふに自己内

佛教の現代的意義

河村 斌

に於ける善と悪、正と邪賢と愚等々の戦ひは、更に社會國家に
於ける偉大なる戦ひであらう。「日本對英米」これこそ正しく
吾々國民が一齊に戦ふべき、そして必勝すべきは宗教本來の面
目ではなくてはならぬ。稱して聖戦と言へるも、之神の言はしむ
る言葉であらう。誠に我々が神に對する絶對憑依の祈りこそ、
戦うて勝つ爲めの武器であり。不完全な孤獨の罪の子を、眞に
救ふべき唯一絶對の「聖なる姿」でもあらう。

光は東方よりの格言にそむかず、遂に來るべきものが來た。
後世の歴史家は今次の大戦を以て人類史の一轉換と見るであら
う。昔「御民吾、生有驗在、天地之榮時爾、相榮念者」と歌つ
た萬葉の歌人は天平の御代に生れ合せたのを無上の喜とした。
而し今我々の目の前に來つゝある來るべきものは眞の人類史の
大轉換を意味するものであり、従つて吾等の喜は今迄何人と雖
も味ひ得なかつたものであらう。然し乍ら願れば其の歩は何と

いふ自然さを以て歩み寄つて來た事であらう。歴史の必然と言
はうか、文化の必然と謂はうか、夏水の堰を切つて奔流するが
如く、而も定められたる運命の如き正確さを以て、一步一步近
寄つて來たのである。而も吾々は其の奔流の最中に居るのであ
る。

吾々は歴史を作ると同時に歴史に作られねばならない。ベル
ナルツス (Bernhardus) は「吾々は巨人の肩に坐して更に多く
更に遠くを眺め得たる侏儒に似たり。吾々の視覺の精確なるに